新潟工科大学紀要　第５号　2000年12月

"Our Fathers' Minds Are Dead, And We Are Governed with Our Mothers' Spirits" [1)]
― *Julius Caesar* についての一考察―

村上世津子*

（平成１２年１０月３１日受理）

"Our Fathers' Minds Are Dead, And We Are Governed with Our Mothers' Spirits" : A Study of *Julius Caesar*

Setsuko MURAKAMI*

Who the protagonist of *Julius Caesar* is has long been discussed, for despite the title of the play Caesar himself dies in Act 3 scene 1. However, most of the critics these days regard Brutus as the dramatic hero. But then why is the play titled *Julius Caesar* instead of *Brutus*?

In order to live up to his name, Caesar represses womanly emotions and tries to govern Rome by manly principles. On the one hand, Caesar's pursuit of manliness brings peace and security to Rome. But on the other hand, repression of womanliness makes him dogmatic and unaware of the warnings of danger, and thus leads him to a tragedy.

Like Caesar, Brutus also tries to live up to his name. His integrity appeals not only to his men but even his enemies praises it after his death. However, his pursuit of honesty through repression of womanliness does not get along with reality. Eventually he falls into formalism and becomes dogmatic. In fact, he becomes a "Caesar". In this play, Shakespeare presents both the greatness and weakness of manliness.

はじめに

誰が *Julius Caesar* の主人公かということは，しばしば問題になってきた．*Julius Caesar* という題がつけられているのに Caesar 本人は 3 幕 1 場で死ぬからである．Bonjour は "Shakespeare made of *Julius Caesar* the drama of divided sympathies" [2)] と言い，Schanzer は "Julius Caesar is...one of Shakespeare's few genuine problem plays" [3)] と言った．とはいえ，最近では大多数の批評家が，Brutus が主人公であるとい

* 英語　助教授

う見解を支持している．しかしそれでは何故 *Brutus* ではなく *Julius Caesar* という題がつけられているのかという振り出しに戻る．MacCallum は，Brutus の生涯の面白さは Caesarism との対立にあるから "It is really Caesar's presence, his genius, his conception that dominates the story" [4]だと考えた．また Dorsch は Brutus と Caesar の死によって Caesar の復讐が完成するので，Caesar の肉体は死んでも精神は勝利するからだと考えた．[5]しかし Caesar の復讐劇という点に焦点を合わせると，悲劇と言うよりもむしろ喜劇の色彩が濃くなる．実際 Dorsch は，この劇は "The Tragedy of Julius Caesar" というよりもむしろ "The Death and Revenge of Julius Caesar" [6]であると述べているし，英潮社新社の講座イギリス文学作品論は *Julius Caesar* を喜劇に分類している．[7]しかし Caesar の復讐劇という解釈はこの劇全体が与える印象にそぐわない．むしろ，劇的な主人公が Brutus であることは否めないのに *Julius Caesar* という題がつけられていることは，Brutus と Caesar は暗殺者と復讐者以上の関係があることを示唆してはいないだろうか．本稿では Brutus と Caesar はどんな関係にあるのか，そしてその関係がこの劇の主題とどう結びついているのか，考察したい．

I

この劇で Caesar が最初に登場するのは 1 幕 2 場である．Caesar は Antony らを引き連れて晴れやかに登場して Lupercal 祭の競争の場へ向かう．Caesar が観客の前に姿を現しているのはわずかな時間に過ぎない．だが晴れやかな行列とあいまって Caesar が口を開こうとすれば "Peace, ho! Caesar speaks" (1. 2. 1)という Casca の一声で音楽がやみ一同が沈黙することや "Forget not in your speed, Antonio,/ To touch Calphurnia" (1. 2. 6)という Caesar の命令に対する "When Caesar says 'Do this,' it is performed" (1. 2. 10)という Antony の答えは Caesar の威厳を観客に印象づける．そして "Beware the Ides of March" (1. 2. 18)という占い師の忠告に耳を貸さず "He is a dreamer. Let us leave him"(1. 2. 24)と言ってうっちゃる態度に観客は Caesar の過信を感じる．Caesar の一行が退場すると後に残った Cassius は，Rome の将来を憂う Brutus に Caesar への反感を植え付けて Caesar 暗殺の陰謀に引きずり込むために口を極めて Caesar の野心と尊大さを語る．だが Cassius の Caesar 評が Caesar に対する妬みによって歪められていることは "Well, Brutus, thou art noble: yet I see / Thy honourable mettle may be wrought/ From that it is disposed" (1. 2. 307-309)という独白から明白なので，Cassius の Caesar 評は観客の Caesar 評に影響を及ぼさない．しかし 2 幕 2 場で妻 Calphurnia の訴えを聞いて，いったんは元老院に行くことを思いとどまり，その旨を迎えにきた反逆者の 1 人である Decius に告げるときの Caesar のセリフ "The cause is in my will, I will not come,/ That is enough to satisfy the Senate" (2. 2. 71-72)は，Caesar の意思は元老院の総意に勝るものだと言わんばかりの傲慢さが感じられる．この後 Caesar が観客に与える傲慢な印象は増していき，Caesar 暗殺直前で Metellus Cimber が追放された兄のために嘆願する言葉を退けるときの Caesar のセリフ "If thou dost bend and pray and

fawn for him/ I spurn thee like a cur out of my way" (3. 1. 45-46)を経て "But I am constant as the northern star, / Of whose true-fixed and resting quality/ There is no fellow in the firmament" (3. 1. 60-62)及び "Wilt thou lift up Olympus? " (3. 1. 74)で頂点に達する．人間の領域を超え，自己を "the northern star" や "Olympus" になぞらえるほど増長している Caesar を見ると観客は，Brutus ら反逆者たちが，王になったあかつきの Caesar の暴政を懸念し，それを阻止すべく暗殺を企てるのも当然のような気がする．

しかし，この劇の中には "Olympus" や "the northern star" のような Caesar の尊大を印象づけるセリフが散見される一方で Caesar の弱さを示唆する個所も多い．たとえば Caesar は片方の耳が聞こえないし，癲癇持ちであるし，暗殺の前には Caesar が最近迷信深くなってきていることが陰謀者たちに気づかれている．さらには結局は Calphurnia の訴えを退けて元老院に行くが一度は思いとどまっている．しかもこれらの弱さのうちで Caesar は片耳が聞こえないということは粉本にはないものである[8]から Shakespeare は史実の Caesar よりも Caesar の弱さを強調していると言える．一体 Shakespeare は何のために Caesar の弱さを強調しているのだろうか？

この劇は仕事を休みにして Caesar の凱旋を祝おうとしている平民たちを護民官が叱りつけ，追い払うところから始まっている．Pompey の Rome 凱旋を祝福した平民たちが Pompey の血族を滅ぼした Caesar の凱旋を祝福することは，Caesar 暗殺後に Brutus が Caesar 暗殺理由を述べたときには Brutus の側につき，Antony の Caesar 追悼演説を聞くと Antony の言い分に頷くばかりか暴徒化して Brutus の家を焼き払い，反逆者の Cinna と名前が同じであるというだけの理由で詩人の Cinna を八つ裂きにすることと関連して，一面では民衆の定見のなさを表しているが，他面では陰謀者たちの言い分と異なり，そしてまた Plutarch の民衆と異なり，Shakespeare の民衆は Caesar に不満を抱いていないことを示唆している．[9]Caesar の戴冠についての民衆の感情を忖度するために Antony が Caesar に王冠を捧げようとするのを Caesar が拒むと民衆が歓喜したという個所があるのは確かだが，これは観客の眼前でなされるのではなく陰謀者の 1 人である Casca の口を通して報告されるだけなので，Caesar が王位につくことに対する民衆の不満が観客に与える印象はそれだけ弱められる．

Caesar 追悼演説で述べられる Antony の "I thrice presented him a kingly crown,/ Which he did thrice refuse. Was this ambition?" (3. 2. 97-98)という言葉に反して Caesar が王になりたい野心を持っていたことは否めない．一度は思いとどまったのに Calphurnia の説得にもかかわらず，そしてまた彼自身の臆病心にもかかわらず，Caesar をして元老院に行かしめるのに大いに貢献をしたのは，Caesar の野心を巧みにつく Decius の言葉 "the Senate have concluded/ To give this day a crown to mighty Caesar. / If you shall send them word you will not come,/ Their minds may change" (2. 2. 93-96)であったからだ．とはいえ，Caesar が権力を私利に供せず，理想的な統治者たらんとしていたことも否めない．Antony によれば Caesar は遺言でローマ市民一人一人に対して "seventy-five drachmas" (3. 2. 235)と "all his walks,/ His private arbours and

new-planted orchards,/ On this side Tiber ” (3. 2. 238-40)を贈っている．また，Plutarch の平民と異なり Shakespeare の平民が Caesar の凱旋を祝福していたことも Caesar の人望の厚さを裏付けるものである．それに “I have not known when his affections swayed/ More than his reason” (2. 1. 20-21)であることは Brutus も認めるところであるし，何より Brutus を陰謀に引き入れようとする Cassius 自身が “Thy honourable mettle may be wrought/ From that it is disposed. Therefore it is meet/ That noble minds keep ever with their likes” (1. 2. 308-310)と独白することにより Caesar 殺害の理由を疑問視している．さらには自分を “Olympus” や “the northern star” にたとえることが不遜な印象を与えるにしても，甘言や哀訴に容易に左右されずに確固とした定見を持ち，法律に則った政治を行うことは名君に求められている素質の 1 つでもある．Caesar の命取りになるとはいえ “What touches us ourself shall be last served” (3. 1. 8)と言って Artemidorous の訴えに耳を貸さない態度は，君主の鑑であると言えよう．そして Plutarch では群衆が押し寄せてきたから手紙が読めなかったのを「自分のことは後回しだ」と Caesar に言わせることによって，Shakespeare は Caesar の名君としての側面を高めていると言えよう．[10]それでは一体君主の鑑としての Caesar と Caesar の弱さ，そしてさらには Caesar の横柄さはどう結び付くのだろうか．

Caesar が横柄だという印象を与える一因になっているのは，Caesar が Caesar と自称することである．[11]それは無論 Caesar の自意識の強さの現れであるが，Caesar は Caesar という固有名詞に偉大で理想的な君主という意味合いを持たせようとしている．換言するならば，I を主語にすると一個人としての発言になるが Caesar を主語にした発言は一個人ではなく公人として，さらに言うならば，統治者としての発言であることを強調している．そして Caesar は聞き手に公人性を押し付けようとするにとどまらず，Caesar という袴をつけて自分が作り上げた Caesar 像にふさわしい態度を演出し続けようとする．[12]先に占い師の “Beware the Ides of March” という忠告を “He is a dreamer; let us leave him” と言って退けることは Caesar の傲慢の表出であると述べた．しかしこのセリフの前後を詳しく検討してみると “He is a dreamer” と言って退ける前に Caesar は占い師を自分の前に連れて来させて，先の警告を繰り返させている．もし本当に占い師の言葉を気にしないくらい尊大であるならば，わざわざ占い師を自分の前に連れて来させて警告を繰り返させたりするだろうか．さらには，暗殺される直前に占い師を見かけたときに Caesar は “The Ides of March are come” (3. 1. 1)と語りかけているが，もし占い師の言葉が気にかかっていなければ占い師の忠告など忘れていたであろう．内心では占い師の忠告が気にかかっているにもかかわらず，“He is a dreamer” と言って忠告を退けるのは，人前で弱さを見せたくないからではないか．同様の態度が Caesar の Cassius 評にも見られる．

I do not know the man I should avoid
So much as that spare Cassius. He reads much,
He is a great observer, and he looks

Quite through the deeds of men. He loves no plays
As thou dost, Antony; he hears no music.
Seldom he smiles, and smiles in such a sort
As if he mocked himself and scorned his spirit
That could be moved to smile at anything.
Such men as he be never at heart's ease
Whiles they behold a greater than themselves,
And therefore are they very dangerous.
I rather tell thee what is to be feared
Than what I fear: for always I am Caesar. (1. 2. 199-211)

Caesar は Cassius の性格を鋭く見抜き，彼が自分にとって危険な存在であることを感じて，その恐怖を彼が最も信頼できる Antony に思わず吐露する．しかし相手がどんなに信頼できる存在であろうとも，Caesar の威厳を保つためには聞き手に自分の心の奥底に巣食う恐怖心を悟られてはならない．そこで "I rather tell thee what is to be feared/ Than what I fear" と言って自分の恐怖心を打ち消し，体面を保とうとする．これらの例から演繹すると，Caesar 像を演出し続けるためには，たとい尊大のそしりを免れないにしても容易に哀訴に屈して法律を曲げてはならないし，Cassius のことが気になってもCassius が怖いといってはならないし，占い師の根拠のない予言に耳を貸すこともできなければ，自分に関することにまず気をとられている姿を公衆の面前にさらすことはできないし，ましてや妻が不吉な夢を見たから議会を欠席して「妻の尻に敷かれる亭主」呼ばわりされることはできない． それどころか女性が代表する弱さや感情的なものを排除し，男性が代表する強さや理性に従うことこそが理想的な君主に求められている条件である．とするならば Caesar の悲劇は Caesar という袴をまとい続けるために彼の中に存在する女性性を排除することを余儀なくされたものの悲劇であると言えるのではないか．

II

王制主義者である Caesar と共和制主義者である Brutus の性格は一見したところ正反対に見える．Caesar は自分が "Olympus" であり "the northern star" たらんとしたのに対して，Brutus は Antony に Caesar の弔辞を述べさせるのに先立ち，Antony のことを Caesar の暗殺には関わらなかったが Caesar の死の恩恵を受け，ローマ市民 1 人 1 人がそうであるのと同様に，共和国の自由市民の身分を獲得する者であると言って市民に紹介する．実際，個人的な理由はないのに Brutus が Caesar 殺しを考えるのは，人間は権力を持つと哀れみを忘れるものだと考えるからである．もちろん，Brutus は Caesar 殺しを決意するときにためらいがなかったわけではない．Caesar 殺しをする個人的な理由はないし，Caesar が理性よりも感情に支配されたためしがない故にためらっている．もし Cassius が Brutus の先祖は Tarquin を追放して Rome の自由を守ったことに言及して

Brutus のプライドをくすぐらなかったなら，あるいは，Brutus の家の窓に入れ文をしてあたかも Brutus が Caesar を倒すことはローマ市民の願いであるような気にさせなければ，Brutus が Caesar 殺しを実行することはなかったであろう．Brutus は Caesar 殺しを決意した後でもまだ Caesar 殺しの不自然さに気づいている．

O conspiracy,
Sham'st thou to show thy dangerous brow by night,
When evils are most free? O then by day
Where wilt thou find a cavern dark enough
To mask thy monstrous visage? (2. 1. 77-81)

そして Caesar 暗殺のおぞましさを認識しているが故に Caesar 殺しを決意する夜には眠れない．

Brutus は Caesar 殺しを実行するにあたり，必要以上に高潔さにこだわっている．誓いは必要ないと言うし，結局は彼にとって命取りとなるのだが Antony 殺しは不要であると言い，のみならず Antony に Caesar の追悼をさせる．Brutus は何故こんな致命的な間違いをするのだろうか？ Caesar 殺しを決意するときの Brutus の独白は批評家たちを悩ませてきた．[13]その独白はまず "It must be by his death"(2.1.10)という結論があって，その後で，その結論に至る根拠を模索しているような印象を観客に与える．そしてその根拠になっているのは "might" や "may" や "would" が示唆する不確実な可能性である[14]:

It must be by his death: and for my part
I know no personal cause to spurn at him
But for the general. He *would* be crowned:
How that *might* change his nature, there's the question.
略
But when he once attains the upmost round
He then unto the ladder turns his back,
Looks in the clouds, scorning the base degrees
By which he did ascend. So Caesar *may*
Then, lest he *may*, prevent. And since the quarrel
Will bear no colour for the thing he is,
Fashion it thus: that what he is, augmented,
Would run to these and these extremities. (2. 1. 10-31，強調筆者)

この不自然な独白は Brutus の直感が Caesar 殺しは変だと叫んでいることを示唆している．心の叫びにも関わらず Brutus が Caesar 殺しをするのは，彼の心の中に自分は Tarquin を追放した Brutus の子孫だから Brutus という名に負けない生き方をしなくて

はならないという意識が強いからである．Brutus は Cassius にこの弱みをつかれて Caesar 殺しを決意するが，決意した後でも心の叫びを消すことができない．だからよりいっそう高潔であろうとするが，高潔さの追求と Caesar 殺しの残虐さの間にはいかんともしがたい溝がある．この溝を埋めるために Brutus は "Let's carve him as a dish fit for the gods,/ Not hew him as a carcass fit for hounds" (2. 1. 172-73)と言って彼がしようとする行為の名前を言い換えてその残虐さを覆い隠そうとする．そして Wilson Knight が指摘するように，この消すことのできない心の叫び故に Brutus は Antony を生かし，彼に追悼演説までさせる．[15]

Calphurnia の忠告を退けて議会に向かったのが命取りになったのだから Caesar が女性性を排除しようとしたことは理解できるにしても，Caesar 殺害を思い悩んで眠れぬ夜を過ごしている Brutus と彼を気遣う妻の間の美しい夫婦愛から判断すれば，Brutus が女性性を否定しているとは言えないのではないかという反論があるかもしれない．確かに Brutus は彼の悩みを共有したいという妻の言い分を聞き入れ，彼女に彼の気持ちを打ち明けることを約束する．妻の気遣いを知ったときに Brutus が言うセリフ "O ye gods,/ Render me worthy of this noble wife!" (2. 1. 301-302) は，Decius に説得し直されて議会に行くことを決心するときに Caesar が Calphurnia に言うセリフ "How foolish do your fears seem now, Calphurnia!/ I am ashamed I did yield to them" (2. 2. 105-106) という妻を蔑む言葉と対照的に，妻に対する尊敬を表現するものである． Brutus のこのセリフ故に，この場面は妻の夫に対する思いと夫の妻に対する尊敬が一致した美しい夫婦愛の場面として観客の心に残るとともに，このセリフはあたかも夫が妻に歩み寄ったかのような印象を与える．だが，Vawter らが指摘するように Brutus のセリフを詳しく検討すると，夫が妻に歩み寄っているわけではないことがわかる．[16]

> I grant I am a woman: but withal
> A woman that Lord Brutus took to wife.
> I grant I am a woman: but withal
> A woman well reputed, Cato's daughter.
> Think you I am no stronger than my sex
> Being so fathered and so husbanded?
> Tell me your cousels. I will not disclose 'em.
> I have made strong proof of my constancy,
> Giving myself a voluntary wound,
> Here in the thigh. Can I bear that with patience
> And not my husband's secrets? (2. 1. 291-301)

このセリフの中で Portia は，自分は女とは言っても Cato の娘であり，Brutus の妻であるから普通の女とは違うんだと言い，「左腿に負わせた傷」の痛みに耐えられることを証明することによって，見かけは女であっても "man's mind" (2. 4. 8)の持ち主であるこ

とを Brutus に印象づけたから，換言するならば Portia が女の属性を捨てて男の領域に足を踏み入れたので，Brutus は彼の決心を妻に打ち明ける約束をする．女性性を捨てて Brutus の悩みを聞いた Portia は Brutus の気持ちを共有することはできても彼を悲劇の道からそらすことはできない．

Brutus が Antony を生かし Caesar の追悼を許す過ちを犯したことも女性的なものの排除と関係している．Antony は "A shrewd contriver" (2. 1. 157)であるから "his means/ If he improve them may well stretch so far/ As to annoy us all" (2. 1. 157-159)である危険性を Cassius が冷徹に見抜いているのに対して，Brutus は Antony のことを "given/ To sports, to wildness and much company" (2. 1. 187-88)であり，"a limb of Caesar" (2. 1. 164)に過ぎないと見くびっている．Brutus が Antony の力量を軽視するのは，彼が女性性を排除し Brutus の名にふさわしい雄雄しい生き方をしようとするあまり女性的な感情が持つ力が理解できないからである．なるほど Cassius は "our fathers' minds are dead,/ And we are governed with our mothers' spirits" と言って嘆く．また Caesar が Cassius のことを危険視したときに Antony は，Cassius は "a noble Roman" (1. 2. 196) だから恐れる必要はないと答えている．さらには，この劇の終わり近くで Caesar の死を知ったときに Brutus は "The last of all the Romans, fare thee well:/ It is impossible that ever Rome / Should breed thy fellow" (5. 3. 99-101)と言って彼の死を悼んでいる．しかしながら，これらのセリフにもかかわらず Cassius は感情よりも理性を重んじ，原理原則を追及する雄雄しいローマ人 [17]というよりもむしろ，感情に支配される女性的な側面を多分に保持している．Brutus をけしかける時には Rome のためという大義名分を前面に押し出したが Cassius を Caesar 暗殺にかきたてる本当の理由は，かつて泳ぎの競争をしたときに溺れかけた Caesar を Tiber から救い出してやったのに，その男がいまや "a god" (1. 2. 116)になり，自分は Caesar が会釈のひとつもすれば腰を曲げなければならない "a wretched creature" (1. 2. 117)になり下がっている悔しさ，つまり真のローマ人ならば当然理性で抑圧しなければならない私怨に駆られてのことであった．

Cassius が感情に左右されやすいことは，Messala が Portia の死を告げたときに他人である Cassius よりもむしろ夫である Brutus の方が，Portia の死を泰然と受け止めているように思えることからもわかる："I have as much of this in art as you,/ But yet my nature could not bear it so." (4. 3. 192-93) Cassius は立派な大義名分を口にするが彼の行動は感情に大いに影響を受けているが故に感情の持つ力の大きさ，すなはち Antony と Caesar の結び付きが Antony に及ぼす影響を直観することができる．そして彼自身が舌先三寸で Brutus の "honourable mettle" (1. 2. 308)をそれが本来向かう方向から歪めて暗殺者の一味に引きずり込んだ経験があるから，強い感情と弁舌が結び付いたときに発揮され得る力を熟知している．しかし "Caesar's angel" (3. 2. 179)であっても Rome の自由という大義のためには私情を殺して Caesar 暗殺の首謀者になり，"As dear to me as are the ruddy drops/ That visit my sad heart" (2. 1. 288-89)と思うほど愛しい妻の死も，人間はいつかは死ななければならぬ存在だとして淡々と受け止めることができる Brutus には感情の持つ底知れぬ力を理解することができない．自分が主義主張のためには私情を

殺すのが当然だと考えているので，理性に訴えかけさえすれば，たとい Antony が"the son of Caesar" (3. 1. 225)であっても納得するだろうと思うし，ローマ市民もまた彼の理路整然とした説明には納得するはずだから，先に自分が Caesar 暗殺に至った経緯を説明しさえすれば，そして Antony の弔辞はあくまで自分たちの許可によるものだと説明をして Antony に自分たちの批判はするなという制限を付けておきさえすれば，市民が Antony の演説に影響されることはないと信じている．

I I I

Brutus の演説は Brian Vickers を初めとする批評家[18]が指摘するような誠実さだけが取り柄で技巧を弄しない下手の見本の演説ではない．Brutus は Caesar 殺しは正しかったという結論を押し付けずに聴衆の判断に委ねた上で自分の Caesar に対する愛は Caesar の親友であった聴衆の Caesar に対する愛情に劣るものではないと言い，それなら何故 Caesar に立ち向ったのか聞きたいという聴衆の問いを予測して，その問いに答えることから説明していく．その問いに対する Brutus の答えは "Not that I loved Caesar less, but that I loved Rome more" (3. 2. 21-22)であった．この答えを平易な英語にパラフレーズすれば "I loved Rome better than Caesar" であるが，あえて "Not that...less, but that... more" という構文を使うことにより，Caesar のことも決して軽視していたわけではないという思いをうまく表現している．そしてこの後でもやはり結論を押し付けず，Caesar 一人が生きて万人が奴隷状態のほうが良いのか，それとも Caesar が死んで万人が自由人として生きるほうが良いのかと聴衆に問いかけることによって，聴衆が自ら後者を選ぶようにうまく誘導している．聴衆が後者を選択すると "As Caesar loved me, I weep for him; as he was fortunate, I rejoice at it; as he was valiant, I honour him" (3. 2. 24-26)と続けている．ここで "as Caesar (he) . . . , I. . . for him" という構文を繰り返して心地よいリズムを作り出すことによって聴衆の心理を話者の主張を受け入れ易い状態に整えて "but" で始まる文で結んでいる．心地よいリズムに加えて "but" の前に述べられていることは Caesar の長所ばかりなので，聞き手になるほど Brutus は私怨から Caesar を殺害したのではなくて Caesar の長所も正当に評価していたのだなと思わしめ，それゆえ，その後に来る "but" 以下の彼の主張を受け入れやすくしている．この後は "There is tears, for his love; joy, for his fortune; honour, for his valour" (3. 2. 27-28) と続けているが，ここで ". . . for his. . ." という形を繰り返すことによってもう一度口調を整えるとともに Caesar の長所を正当に評価していることを聴衆に再認識させることによって，最後の "and death, for his ambiton" (3. 2. 28)が観客の胸にすんなりと落ちるようにしている．そして "Who is here so base, that would be a bondman?" (3. 1. 29) や "Who is here so rude,/ that would not be a Roman?" (3. 2. 30-31)や "Who is here so vile, that will not love his/ country?" (3. 2. 32-33)のように修辞疑問を重ねて "None" (3. 2. 35)という答えを引き出すことによって聴衆の気持ちを Brutus の主張に引き入れて，それならば Caesar 殺害は正当な行為であったと結論づける．その上で最後に彼の行為の

公正さを観客に印象づけるために“as I slew/ my best lover for the good of Rome, I have the same/ dagger for myself, when it shall please my country to/ need my death”(3. 2. 44-47)とたんかを切って壇上から降りる．批評家たちの批判にもかかわらずBrutusの演説が聴衆にかなりの効果を与えていることはBrutusのたんかに対する聴衆の熱狂的な反応が示唆している．

All: Live, Brutus, Live, live.
1 Plebeian: Bring him with triumph home unto his house.
2 Plebeian: Give him a statue with his ancestors.
3 Plebeian: Let him be Caesar.
4 Plebeian: Caesar 's better parts
Shall be crowned in Brutus.
1 Plebeian: We 'll bring him to his house with shouts and clamours.
(3. 2. 48-53)

自分の演説が聴衆に熱狂的に歓迎されたと感じるからこそ，Brutusは Antonyが Caesarの追悼演説をするのは自分たちの許可を得てのことであるから Antonyの話も聞くようにという指示をして退場するのである．ここで聞くという言葉に“grace”(3. 2. 58)という単語を用いているが“listen”を用いずに“to confer honour or dignity upon”[19]という意味を持つ“grace”を用いているのは，また，聴衆に“I do intreat you, not a man depart”(3. 2. 61)と懇願しているのは，自分の演説が充分に効果を上げたことに対する満足感が生み出す寛容ゆえであろう．しかしAntonyの演説はBrutusに対するこれだけの心酔を憎悪に変え，Brutusに対する熱狂的支持者であった聴衆を暴徒に変える．群衆の移り気は別にしてAntonyの演説の何がそれほどまで聴衆を突き動かしたのかを以下で検討する．

Brutusの演説が“Romans, countrymen and lovers”(3. 2. 13)という呼びかけで始まっていたのに対して，Antonyの演説は“Friends, Romans, countrymen”(3. 2. 74)という呼びかけで始まっている．真先に“Romans”と呼びかけることによってBrutusが「感情よりも理性を重んじるRomansたる聴衆の理性に訴えかける演説をする」という意思表明をしているのに対して，Antonyはまず“Friends”と呼びかけることによって聴衆の仲間意識に訴えようとする．そして“lend me your ears”(3. 2. 74)と続け，Brutusに言及するときには，彼が演説の初めで繰り返し用いた“honour”の形容詞形である“honourable”をつけることによって，Caesarの腹心であったAntonyがBrutusに復讐しようとしているのではないかと疑っている聴衆の警戒心を解く．そして“The noble Brutus/ Hath told you Caesar was ambitious:/ If it were so, it was a grievous fault”(3. 2. 78-80)と続けるので，聴衆は，なるほどAntonyは立場を弁えているなという印象を受ける．しかしここで仮定法が使われていることは，Antony自身はCaesarが野心を持っていたとは思っておらず，よって由々しき罪を犯したとも思っていないことを示唆してい

る.

Antony は次の行で "grievous" の関連語である "grievously" を用いて "And grievously hath Caesar answered it" (3. 2. 81)と言う. 80 行めの "grievous" は "bringing serious trouble or discomfort; having injurious effects" [20]の意味で用いられているが, 81行めの "grievously" は "heavily; with a heavy penalty, at a heavy or high rate" [21]の意味であり, 関連語が少し意味をずらして用いられている. Antony の演説ではこの「ずれ」が非常に重要である. 中でも圧巻なのは Antony がこの後に続くセリフで Brutus らの主張する Caesar 像と実際の Caesar のずれを提示していくことによって聴衆の気持ちを 180 度転換させていることである. 87-88 行めで "honourable man" である Brutus は Caesar に野心があったと言うと付言するが, 観客はだんだんと "honourable" という語に対して, また Brutus の主張に対して不信感を抱くようになっていく. 97-98 行めにかけては ambitious と正反対の事実— Caesar は王になりたいどころか Lupercal で王冠を退けたこと—に言及する. 99-100 行めでまた "Yet Brutus says, he was ambitious;/ And sure he is an honourable man" が繰り返されるが, ここまで来るとこの言葉は明らかに皮肉になる. ここまで誘導すれば大丈夫という自信があるから Antony は, "You all did love him once, not without cause:/ What cause withholds you then to mourn for him?" (3. 2. 103-104)とあからさまに聞く. Antony の自信を裏づけるように聴衆の反応は Caesar に対してかなり同情的になっている. この聴衆の変化の手応えをつかんだ上で Antony は 119-121 行めにかけて, かつて偉大であった Caesar と今や屍となり横たわっている Caesar を対比する.

この後 122-128 行めで, 自分は聴衆の心を "mutiny" や "rage" にかきたてる気持ちはなく, Brutus らに対して不当な仕打ちをするくらいなら死者である Caesar や聴衆の皆さんに不当な仕打ちをしたいと述べるが, この言葉を額面通りに受け取る聴衆はもはや存在せず, むしろ聴衆の中に沸き起こりつつある Brutus らに対する不信感と怒りに火をつけるだけである. Antony はいよいよ Caesar の遺書を取り出す. しかし即座に遺書を読み上げるのではなく, もし聴衆がその内容を知れば歓喜のあまり我を忘れるであろうから読むつもりはないと言って Caesar の遺書に対する聴衆の興味を募らせ, 聴衆に "The will, the testament." (3. 2. 155)や "The will, read the will" (3. 2. 156)と要求させることによって, 自分としては "honourable" な Brutus らに悪いから読むつもりはなかったのだが, 聴衆の熱意に押し切られて読むことにしたというポーズを取る. この段階まで来ると "honourable" はもはや痛烈な皮肉でしかあり得ない. Antony の "I fear I wrong the honourable men" (3. 2. 152)という言葉に対して聴衆は "They were traitors" (3. 2. 154)や "They were villains, murderers" (3. 2. 156)という激しいののしりの言葉で応じる. 聴衆の気持ちが完全に Brutus らから離れて, もはや彼らに気兼ねをする必要がなくなったことを悟った Antony は, 壇上から降り, 聴衆とともに Caesar の死体を取り囲んで聴衆に語りかける. ただしこの段階でもまだ Antony は Caesar の遺書の本題に入らずに, Caesar の外套を見せ, Cassius と Brutus が刺した傷跡を指し示し "Caesar's angel" (3. 2. 179)であった Brutus の忘恩が Caesar に止めを刺したことを説明し, 聴衆の Caesar

に対する憐憫の情に訴えかけた後で反逆者たちに切り殺された Caesar の痛ましい姿そのものを聴衆に提示して聴衆の復讐心に火をつけ，逆上させる．聴衆の怒りがここまで沸騰してようやく Antony は Caesar の遺書を読むが，内容を知った聴衆は暴徒と化す．

以上検討してきたように Brutus の演説も技巧を駆使し，演説の直後には聴衆に熱烈に歓迎されている．にもかかわらず後続の Antony の演説に効果がたちどころに覆されているのは，Brutus の演説が修辞疑問や同型反復が生み出すリズム感によって聴衆を Brutus の主張に同調し易くさせただけだからである．聴衆は Caesar が野心を抱いていたから殺害されたのは当然であるということは理解できるにしても，どういう点で野心を抱いていたと言えるのかについての具体的な説明が欠如しているので、聴衆の理解はあくまでも観念的な理解にとどまり，心からの共感を引き出すまでには至っていないからである．いや，Brutus の演説を聞き終えた聴衆の反応 "Let him be Caesar" (3. 2. 51)や，"Caesar's better parts/ Shall be crowned in Brutus" (3. 2. 51-52)から判断すると，観念的な理解さえ怪しいものである．Antony が彼の演説の中で皮肉を込めて語る言葉，"I am no orator, as Brutus is" (3. 2. 210)は半面の真理をついている．ある意味では聴衆が Brutus の演説を聞いて彼に同調したのは Brutus の技巧にうまく誘導されたからである．なるほど Antony の演説は Brutus の演説以上に技巧を駆使して反逆者たちに向いていた聴衆の気持ちを Caesar に向かわせる．しかし Antony の演説が大成功を収めるのは技巧に終始していないからである．Brutus は野心故に Caesar を殺害したと主張したが，Antony は Caesar が野心を抱いていたとは言えないどころか，むしろ寛大で慈悲深い統治者であったことを具体例をあげて説明していった．言葉を駆使して聴衆の知性に訴えるだけでなく，Caesar の引き裂かれた外套を提示し Caesar 本人の痛ましい姿を提示することによって反逆者たちの残忍さを視覚に訴えかけ，最後に Caesar の遺書を読むことによって聴衆に市民に対する Caesar の思いやりを感得させたが故に Antony の演説は大成功を収めることができた．技巧とは縁遠い印象を与える Brutus の演説が技巧に終始し，いかにも抜け目なさそうな Antony の演説が技巧以上のものを持っているのは，Brutus の Caesar 殺しが彼自身をさえ心から納得させることができなかった理性至上主義に由来するのに対して，Caesar を追悼する Antony の演説は技巧の駆使もさることながら Brutus が抑圧した Caesar に対する心からの愛情につき動かされて危険な賭けを冒していることも確かだからである．Antony は自分が心から感じていることを語っているから具体的に語ることができ，聞き手の心に響かせることができるのである．

IV

Caesar 殺害理由を説明する演説をしたときの聴衆の反応，"Let him be Caesar" が Brutus の趣旨を理解していない反応である旨を先述したが，この反応は反逆者の一味に加わることを決意した以降の Brutus の行動についての半面の心理をつくものでもある．決意するまでは Cassius の「押し」や「入れ文」が必要であったし，また，夜も眠れず悶々とした時を過ごしていたが，いったん決意すると主導権を握るのは Brutus である．

Brutus は他のメンバーたちの意見を押し切り，Antony を生かし，Antony に Caesar 追悼演説まで許すが，他者の意見に耳を貸さずに自分の意思を押し通そうとする Brutus の態度は，観客に占い師の警告や Artemidorous の言葉を退けた Caesar の態度を思い出させる．Brutus の独善的な態度が頂点に達するのは，4 幕 3 場の Brutus と Cassius の口論の場である．口論のきっかけは Cassius の部下である Lucius Pella が賄賂を受け取ったことを Brutus が非難したことである．Cassius は Pella のために嘆願の手紙を書くが Brutus はその手紙を無視するばかりか，賄賂を受け取った部下のために嘆願したことで Cassius 自身をも批判し，さらには Cassius 自身のことも下らぬ人間に官職を売りつける握り屋だと批判する．"honour" と "honesty" の追求にがんじがらめになっている Brutus には，Antony と Octavius の連合軍と戦闘態勢にある今は些細な罪をとがめだてしている場合ではないことが理解できない．とは言うものの，ここではまだ Brutus の主張にも一理ある．そもそも Brutus ら反逆者たちが Caesar を暗殺したのは "justice" (4. 3. 19) のためだったのだから，Antony 軍に勝てさえすれば微罪には目をつぶるというのであれば，彼らの大義は崩れるからである．しかし金の調達の仕方を批判する一方で，自分は不正な手段で農民のなけなしの金を巻き上げることができないから金を融通してくれるように申し込んだのに断られたと言って Cassius を非難するときには，Brutus を弁明する余地はない．

> I did send to you
> For certain sums of gold, which you denied me,
> For I can raise no money by vile means:
> By heaven, I had rather coin my heart
> And drop my blood for drachmas, than to wring
> From the hard hands of peasants their vile trash
> By any indirection. (4. 3. 69-75)

Brutus は彼の硬直した honesty の追求が現実と折り合わないことを直視することができない．Caesar 殺しをするときに "a carcass fit for hounds" (2.1.173) としてではなく "a dish fit for the gods" (2.1.172) として殺そうと言うことによって Caesar 殺しの残虐さを隠蔽しようとしたように，ここでも他者に汚れ役を押し付けることによって自分の honour を守ろうとする．2 人の激しい口論は，Brutus の激昂に驚いた Cassius が胸をはだけて Brutus に殺せとけしかけたときに突如として終わるが，和解した後も Brutus の独善は変わらず，Cassius のより明敏な戦略を退けて Phillippi で敵と交戦するという彼の主張を押し通す．

さて Cassius との話し合いも終わって Brutus が眠りにつこうとするときに Caesar の亡霊が現れる．その亡霊は Brutus の "Speak to me what thou art." (4. 3. 279)という問いに対して "Thy evil sprit" (4. 3. 280)と答える．また，この劇の終わり近くで，死期を悟った Brutus が Strato の持つ剣の上に飛び込んで自害するときに Brutus は "Caesar,

now be still./ I killed not thee with half so good a will" (5. 5. 50-51)と言う．何故 Caesar の亡霊が Brutus の "evil spirit" で何故 Brutus が死んだら Caesar の霊が休まるのか．1つの解釈は，Brutus は Caesar 殺しの罪の意識にさいなまれているから Caesar の亡霊が Brutus の "evil spirit" として Brutus につきまとい，Brutus が死ぬと Caesar の復讐が果たされたことになるから Caesar の霊が休まるというものである．*Julius Caesar* を Caesar の復讐劇と見なす解釈の所以である．しかしこの劇を Caesar の復讐劇と見なす解釈はこの劇全体が与える印象にそぐわない．むしろ Caesar の亡霊が Brutus の "evil spirit" なのは Caesar 殺しを決意した後の Brutus の行動が，当初の彼の意図に反して彼が打ち倒そうとした独裁者的な行動になっていくからではないか．[22]つまり，Brutus にも Caesar 的な独裁者的な精神が内在していて，それが彼に悲劇の道を歩ませているから "thy evil spirit" なのではないか．Caesar の精神は Brutus の精神に内在するものであるから Brutus が死んだときに初めて Caesar の精神も死ぬ—休まる—のではないか．[23]

以上検討してきたように，この劇の中では Caesar も Brutus もそれぞれの名にふさわしい生き方をするために女性性を抑圧することが彼らの悲劇につながる．しかしだからと言って Robert Miola のように "hearth and home" の主張を "the city" の主張の下位に置く Rome の倫理観を "strange, unnatural, inhuman, and doomed" [24]というのは言い過ぎであろう．何故なら私的な感情を抑圧して，公人としての，理想的君主としての，Caesar 像にふさわしい生き方をすることが Rome に安定をもたらしていたことは Caesar 亡き後の Rome が "Liberty! Freedom! Tyranny is dead!" (3. 1. 78)という Cinna の言葉と反対に混乱を極めることから自明だからである．また Brutus について言えば，彼の「高潔さ」の追求はあまりにも現実離れしていて彼自身が実行できず，結局は高潔な「見せかけ」追求に堕するばかりか Brutus 自身が "Caesar" になっていくことは否定できないにしても，Brutus の高潔さの追求が反逆者たちに一目置かせて最後まで彼につき従わせる魅力になっていることも否定できないからである．自害する直前に Brutus の言う言葉 "Countrymen:/ My heart doth joy that yet in all my life/ I found no man but he was true to me" (5. 5. 33-35)は Brutus 自身の Caesar への裏切りを忘れた自己満足の言葉に過ぎず，最後まで Brutus が成長していないことを示唆するものだと考える批評家もいる．[25]だが和解した後は Brutus につき従えば負けることを鋭く見抜きつつも Cassius が最後まで Brutus に従ったことや，Brutus の死の直前の場面で Lucilius がみずから Brutus と名乗って彼の身代わりとなって捕らえられることや，殺してくれと頼んだときに部下たちがみな辞退したので Brutus は結局 Strato が握りしめた剣に飛び込んで自決しなければならなかったこと，そして Strato が敵の前で堂々と Brutus の立派な最期を語ったことは，Brutus の言葉の正しさを裏づけている．いやそれどころか Brutus は敵であった Antony から "This was the noblest Roman of all" (5. 5. 68)という賞賛の言葉を引き出し，Octavius をして "According to his virtue let us use him,/ With all respect and rites of burial./ Within my tent his bones tonight shall lie,/ Most like a soldier, ordered honourably" (5. 5. 76-79)と言わしめるだけの魅力を持つ人物でさえある．ただし，ここで忘れてはならないのは Brutus の追求しようとする高潔さは現実とは相容れず，

現実を無視して高潔さを追及しようとすると，利点よりもむしろ欠点のほうに大きく針がぶれることである．死した Brutus に対しては最大限の賞賛の言葉を贈る Antony と Octavius も、生きて対峙している時には "villain" (5. 1. 39)や "traitor" (5. 1. 63)と痛罵している．Antony と Octavius は Brutus が死に，彼の「高潔さ」がもはや現実に何らの介入もすることができなくなり，その美しい意気込みだけが残ったときに始めてその「高潔さ」を賞賛することができるのである．

結び

Caesar という名に偉大な名君という意味を持たせて，その名にふさわしい生き方をするために女性的な感情的なものを排除し，男性的な理性に基づく政治を行おうとする Caesar の態度は，Rome に安定と平和をもたらした．しかし他方では女性性の排除は彼を独善的にし，彼に虚勢を張らせ，危険の警告を無視させ，悲劇の道を歩ませる．同様に Brutus という名に恥じない生き方をしようとする Brutus の「高潔さ」は最後まで味方を引きつけるだけでなく，死後は敵将にも賞賛される．しかし女性性を排除した高潔さの追求は現実と折り合いをつけることができず，結局，形式主義に陥るばかりか，高潔さを強要する過程で彼自身が Caesar と同様に独善的になっていく．Shakespeare は *Julius Caesar* の中で Caesar に代表される男らしさを追求する人物の偉大さとその偉大さと不可分の弱さを描いていると言えよう．

注

1) David Daniell, ed. *Julius Caesar* by William Shakespeare (Croatia: Thomas Nelson and Sons,1998) 1. 3. 82-83. 以下 *Julius Caesar* からの引用はすべてこの Arden 版により本文中に幕，場，行を記す．

2) Adrien Bonjour, *The Structure of Julius Caesar* (Liverpool: Liverpool UP, 1958) 3.

3) Ernest Schanzer, *The Problem Plays of Shakespeare* (London: Routledge& Kegan Paul, 1963) 70.

4) MacCallum, *Shakespeare's Roman Plays and Their Background* (London: Macmillan,1968) 214.

5) T. S. Dorsch, ed., introduction, *Julius Caesar* by William Shakespeare (Massachusetts: Harvard UP, 1958) xxxviii.

6) Dorsch, xliv.

7) 『シェイクスピア＜喜劇 II ＞』英潮社新社　関本まや子著訳　1983 年 51-69.

8) MacCallum, 219.

9) Dorsch, xxviii-xxix.

10) Arthur Humphreys, ed., *Julius Caesar* by William Shakespeare (Oxford: Oxford UP, 1998) 14.

11) Norman Sanders, ed., commentary, *Julius Caesar* by William Shakespeare (London: Penguin Books, 1996) 154.

12) Caesar が Caesar 像を演じていることは Traversi や Simmons や Foakes ら多くの批評家の指摘するところである.

Derek Traversi, *Shakespeare: The Roman Plays* (London: Hollis& Carter, 1963) 36.

J. L. Simmons, *Shakespeare's Pagan World* (Sussex: Harvester, 1974) 93.

R. A. Foakes, "An Approach to Julius Caesar" *Shakespeare Quarterly* 5 (1954): 265.

13) Humphreys, 128-129.

14) Daniell, 197.

15) G. Wilson Knight, *The Wheel of Fire* (London: Methuen, 1983) 129.

16) Marvin L. Vawter, "Division 'tween our Souls" *Shakespeare Studies* 7 (1974): 186.

Robert S. Miola, *Shakespeare's Rome* (Cambridge: Cambridge UP, 1983) 95.

17) Foakes, 269.

18) Brian Vickers, *The Artistry of Shakespeare's Prose* (London: Methuen, 1968) 244-45.

Milton Crane, *Shakespeare's Prose* (Chicago: U of Chicago P, 1963) 144-45.

19) *OED* "grace" 5a.

20) *OED* "grievous" 2a.

21) *OED* "grievously" 1b.

22) Simmons, 87.

23) Simmons, 107.

24) Miola, 96-97.

25) Ruth Nevo, *Tragic Form in Shakespeare* (Princeton: Princeton UP, 1972) 126.